シンポジウム

K-RIP（九州地域環境・リサイクル産業プラザ）の発想と活動

川崎　順一（新日本製鐵株式会社八幡製鐵所総務部開発企画グループ部長）

１．はじめに（現状認識）：

（１）大きな社会環境の変化～２１世紀のキーワード～

・グローバル化・ＩＴ化・少子高齢化・地球環境問題・循環型社会・聖域なき合従連衡・大競争時代・規制緩和・産業再生・都市再生・教育問題・企業倫理　―　―　―　等）

（２）企業の生き残り作戦（リストラクチャリング）－　＜スピード＞　－

（３）真の産学官（民）連携が必要

（４）部分最適（個）から全体最適（地域）の視点を強化

２．Ｋ－ＲＩＰ発足の経緯：

（１）九州地域の動向（ポテンシャル）

①Ｈ６年、旧九州通商産業局主導で産学官民での環境調和型経済社会研究会発足（座長：花嶋元福大教授）～リサイクル促進協議会へ発展継承（Ｈ９～Ｈ１４）し環境ビジネスに関する検討を推進。

②過去の公害克服（自治体・企業・市民）の歴史、蓄積された技術と人材、各種大学・公設研究機関の存在、市民との信頼関係等。

③全国１６ヶ所のエコタウン地域の内、３ヶ所が当地域に存在。
北九州市（Ｈ９．７）大牟田市（Ｈ１０．７）地域指定済。水俣市検討中（Ｈ１３．２地域指定）。

（２）環境ビジネス展開上の優位性

①素材系資源循環の中核となる素材産業の集積

②エネルギー関連産業の集積

③有機系資源循環に関わる産業の立地

④大学、研究機関のリサイクル・環境技術開発機能集積

⑤市場の存在（リサイクル率の低さ・焼酎粕などの市場特性等）

⑥地域支援・産業立地基盤の存在（遊休地・港湾・物流拠点等）

⑦アジアとの近接性（環境技術協力）・歴史・文化的特性、等々。

以上の諸条件から、九州地域を循環型社会の実証的モデルとすべくＨ１１．１１にＫ－ＲＩＰを設立。

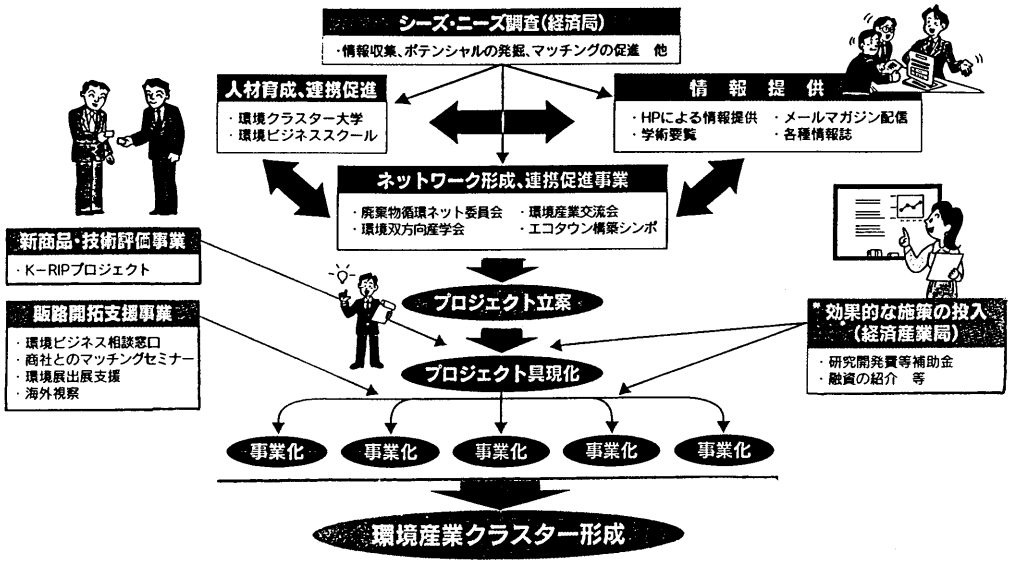
３．Ｋ－ＲＩＰの活動概要：

（１）Ｋ－ＲＩＰとは「九州地域環境・リサイクル産業交流プラザ」
（ Kyushu Recycle and Environmental Industry Plaza ）　のことを言う。

①環境リサイクルに関わる産学官の関係者の横断的組織として設立。
②環境ビジネスの育成・振興を通じて九州地域を循環型社会の実証的モデルとし、新産業の創出と地域の活性化を図るもの。
③入会制限なし。会費：法人（個人）５万円（５千円）／１口。現在の会員は、法人（企業・団体）２７２社、個人（大学含む）１４７人、特別会員（自治体）２２でトータル４４１会員。（Ｈ１４．７／Ｅ現在）

（２）主な事業内容　～四つの部会活動～
①調査・情報・啓発部会（廃棄物循環ネットワーク）
②交流部会（環境ビジネス相談窓口・環境産業交流会）
③学術部会（環境ビジネススクール・環境クラスター大学）
④プロジェクト部会（戦略プロジェクトの採択支援）

産業クラスター形成に係るＫ－ＲＩＰ事業の流れ



（３）具体的な成果（Ｈ１１．１１～　Ｈ１４．３抜粋）
①２６事業を実施し約７３００人の参加。
②Ｈ１３年度から経済産業省の「産業クラスター計画」（１９プロジェクトの１つ）として選定。～上記のＫ－ＲＩＰ事業フロー参照～
③Ｈ１３年４月、（独）ブレーメンイニシアティブ２００１で「Ｋ－ＲＩＰ活動事例」発表。
④各種活動を通じて、人、情報、知識との出会いにより次世代の人材育成やネットワークの形成および新規事業会社の設立等を図る。

4．課題と今後の展開について：

（1）真の産学連携による早期産業化：

①大学のシーズ技術と民間のニーズ゛のマッチングの徹底実践

②コーペティション（競争と協調）の実践により、技術開発のスピードアップと早期産業化を図る。（企業×企業、大学×大学、企業×大学）

③コーディネーターの登録・処遇と適材適所の派遣（スピード重視でネット上での対応等）

④ベンチャー系企業への資金・営業面等からの支援体制の整備。

⑤域内のバランスのとれた環境産業ゾーンの形成とゾーン間ネットワークの形成

（2）人材育成について

①企業の経営層自ら循環型社会についての基本認識の醸成と当該分野の人材育成が急務であることの方針提示。

②企業単位（部分）よりも地域単位（全体）のビジネス企画が必要であり、中立・公平に自治体の産業政策とも連動できる人材の育成。

5．おわりに：　～環境ビジネスの実証的モデル地域を目指して～

（1）Ｈ１１年５月、旧九州通商産業局の会議室にて、「環境問題解決のための議論を実行に移そう！！」、「走りながら考えよう！」、「俺が（点）ではなく地域（面）としての活動を強化しよう！」、「大学も民間のためになるような技術開発をしよう！」、「中小企業にとって、大学は敷居が高いのではないか！」等々の議論の中で、Ｋ－ＲＩＰの骨格を作成。

（2）第一ステージとしてはまずは合格点と言える。しかし、九州地域での「環境の産業化」や「産業の環境化」はまだまだである。

（3）２１世紀は「個性の時代」とも言われ、九州地域の個性は「ものづくり・環境・アジア」がキーワードだとすれば、ＩＴを活用し九州の各地域の基幹産業に、環境保全型の、経営理念、製造原理、行動規範を吹き込みその徹底実践が求められている。そして、それはＫ－ＲＩＰが提唱するような各主体の同志的連携の中から得られるものと考える。